

今日は、降臨節第2主日で、聖書の日曜日でもあります、今週の木曜日は12月8日です。私の頭の中では、太平洋戦争が始まった日、という気持ちが強いのですが、若い人の間では、ビートルズの一人、ジョン・レノンが銃弾に倒れて、死んだ日ということで覚えられているようです。以前、NHKの番組を見ていたら、ジョン・レノンの妻であるオノ・ヨーコさんが出演して、ジョン・レノンの訴えた「愛と平和」について、いろいろ語っていたのを覚えています。彼の歌った「イマジン」という歌が、平和のシンボルのようになっていたのですが、その歌い出し「天国なんてないんだ、と想像してごらんよ」という文章を、私は大学生の時、同じ神学部の学生から示されて、びっくりしたことがあります。

ちょっとその歌の日本語訳を紹介してみます。

『想像してみて、天国はないって、やれば簡単だよ、足元に地獄はなく、頭上には空だけ
想像してみて、みんなが 今日のために生きているって』

私など、「天の国のために、結婚しない者もいる。」というテーマで、ずっと独身のことを考え、卒業論文も書こうとしていたので、全くそれを打ち消されたような気持ちになりました。

「天国とか地獄」という発想は、良い人と悪い人、勝利者と敗北者という分離を意識しているような言葉に見えて、そのような隔ての発想は、人類の平和とは違う、何か宗教のエゴのように、ジョン・レノンには映り、その平和運動の影響を受けた友人が、私たちクリスチャンの古い思想を、見直すように促したのでしょう。ジョンというのは、ヨハネという名前の英語読みですが、20世紀のヨハネさんは、「天国なんてないんだ、と想像してごらんよ、」と言います。

今日の福音書には、洗礼者ヨハネが呼びかけた、「悔い改めよ。天の国は近づいた。」という言葉が出てきます。20世紀のヨハネさんであるジョン・レノンとは、全く反対に、この洗礼を施す1世紀のヨハネ、聖書のヨハネさんは、天国を意識して、生き方を変えろ、と訴えているのです。

それじゃ、このふたりのヨハネさんは、正反対のことを言っているのか、ということになりますが、どうも、これは、二人の「天国」という言葉の使い方、その言葉の内実が違うのであって、言おうとしていることは、同じではないか、という気持ちがしてきました。

20世紀のヨハネ、ジョン・レノンは、この世に絶望して、天国や地獄など、あの世のことばかり考えるのはやめて、この世に平和をもたらすことを考えよう、と言っているように思えます。

もう一度、全文を読んで見ます。

想像してみて、天国はないって、やれば簡単だよ 足元に地獄はなく 頭上には空だけ
想像してみて、みんなが 今日のために生きているって

想像してみて、国は存在しないって 難しくないよ そのために殺したり死ぬことはないよ
宗教もない 想像してみて、平和な人生を

(ジョン・レノンが、この歌を作ったのは、ベトナム戦争反対の運動のためでした。)

想像してみて、財産はないって できるかな 欲張りや飢えは必要ない 人はみな兄弟
想像してみて、みんなが 世界を共有しているって

僕が夢を見てるって思うかな でも僕ひとりだけじゃない
いつか君たちも一緒になって 世界がひとつになってほしい

どうでしょうか。「天国も地獄もない、国も宗教もない、」と言われると、私たちキリスト教、特に英国の国教会から発生した聖公会としては、否定されたように思うかもしれませんが、国や宗教の名のもとに、今までどんなひどい戦争が繰り返されたか、それを思う時、人がみな兄弟になり、世界がひとつになるなら、ひとつの宗教へのこだわりは、宗教エゴということにはならないでしょうか。

さて、先週のイザヤ書は、将来エルサレムの神殿が栄光を受けて、世界中の人が、川の流れのようになって、エルサレムの神殿があるシオンの山に押し寄せること。そして、そこから聖書の御言葉が語られるのを聞いて、人々が自分たちの戦争の武器を、平和の道具に作り変える様子が語られていました。剣を打ち直して鋤にし、槍を打ち直して鎌にする、という幻です。

今日の旧約の箇所は、ジョン・レノンが語ったのと似ているような気がします。

「エッサイの株からひとつの芽が萌えいで その根からひとつの若枝が育ち、その上に主の霊がとどまる」これは、新しい王様が来られる、と言おうとしているのです。イエス様より1000年前に、ダビデという立派な王様がいましたが、この人は、ベツレヘムに住む、エッサイという人の子どもでした。つまり、ダビデの血筋から、新しい王様が出てくるのですが、その人が治める世界がどんなものかを、語っています。

「狼は小羊と共に宿り 豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち 小さい子供がそれらを導く」

強い者と弱い者が、共存している平和な姿をイザヤは語っています。

このような国が、この世に実現したらいい。いや、もうすぐそんな世界が来るんだ、と洗礼者ヨハネは、人々に語りかけようとしています。しかし、そんな世界は、タナボタ式に与えられるわけではない。

「悔い改め」ということが必要だ、と1世紀の洗礼者ヨハネは主張します。これはただ、過去のことを後悔するのではなく、根本的に生き方を変えることだ、回心することだ、と言うのです。

ヨハネは7節から、ユダヤ人の指導者たちに向かって「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。」と言いました。

ユダヤ人であれば救われる、とか、ある宗教儀式を受けたら、平和でいられる、というものじゃない。

大切なことは、今日の使徒書でパウロが「神の栄光のためにキリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなた方も互いに相手を受け入れなさい。」ということではないでしょうか。

イザヤが、今日の旧約の最後に「その日が来れば、エッサイの根は すべての民の旗印として立てられ 国々はそれを求めて集う。そのとどまるところは栄光に輝く。」と書き残している箇所を、パウロは言い換えて「エッサイの根から芽が現れ、異邦人を治めるために立ち上がる。異邦人は彼に望みをかける。」とっています。

自分の国家、自分の宗教ではなく、違った国の違った習慣を持った人たちを受け入れる、そんな姿勢に変わる時、素晴らしい世界がやってくるんだ、と、イザヤも、1世紀の洗礼者ヨハネも、異邦人への使徒であるパウロも、そして、今週の木曜日が命日の、20世紀のヨハネ、ジョン・レノンも私たちに語っているように思えます。

ウクライナとロシア、日本と北朝鮮、中国とアメリカが対立している現在、私たちは聖書の日曜日である今日から始まる降臨節第2主日の週の木曜日、太平洋戦争が始まり、ジョン・レノンが殺された日に向けて、改めて二人のヨハネのメッセージを味わいたいと思います。